

分苑たより

なごみ

大本
名古屋分苑

分苑長

霜月 月次祭挨拶

お茶席の接待をされておられました。
お疲れさまでした。

サルートン
皆様こんにちは、
霜月の月次祭にご参拝頂き
ありがとうございます。

本日、私は亀岡で全国主会長・人類愛善会協議会会議に参加しており皆様方に直接挨拶が出来ず申し訳ありません。

開教百三十二年の開祖大祭は秋晴れの爽やかな陽さしの元で台湾と日本の同院の多くの方々の参拝者も含めて執行されました。

前日の二日の日には大雨の中、ここに二金婚式と七五三のお祝いも大変でしたし、また交通機関も新幹線の徐行運転・JRが亀岡から西は運休で大祭のご奉仕される方達は、大変な不便をなされました。

しかし大祭当日には笑顔で、

あと一月余りで令和六年の年が終わりますが、今年は五・六・七ミロクの中年で十月十八日に教主さまご臨席で三重の香良洲神社祈念碑建立の除幕式が無事に終わり、香良洲神社に大本から、教主さまのご作陶二点・おからすのかみのご染筆・聖師さまの耀盃一点が二十七日に末永く御神宝として収蔵されました。

現在綾機平（研究センター跡地）は来年の十月十二日に「綾の聖地エルサレム大本歌祭」が開催されます。

大本の經典において『エルサレム』という言葉には天国楽土という意味があり、地上においては、地の高天原と称えられる綾の聖地・本宮山もその一つと示されています。

皆様へは十二月七日の月始

祭には、令和七年度の行事予定表を配布させていただきま

す。

この日は、月始祭終了後に、令和六年度の暫定と令和七年度の予算審査を総代の方々に審査していただきます。

委任状は、各総代の方々の棚に入れてあります。

今年は、インフルエンザの感染者も増えつつあります、どうか健康に気を付けて下さい。

本日の参拝ありがとうございます。

コーランダンコン

行事報告

●月始祭

十一月二日（土）

参拝者 八名

齋主 妹尾 正治

祭員 島山 茂

祭員 仙頭 志音

進行 天野 芳幸



●月次祭

十一月十七日（日）

参拝者 三十五名

齋主 飯田 和彦

祭員 堀 健太郎

祭員 島山 茂

祭員 影近 博己

裏方 伊藤久仁男

典礼長 小林 清人

伶人 飯田 直美

伶人 佐古 美鈴

伶人 長谷川美枝

伶人 伊藤恵美子

進行 伊藤 秀子



●海津市松植樹地 献劳作業
十一月十日（日）

参加者 伊藤久仁男

森 満政

●誠心会活動報告

十一月二十三・二十四日

（土・日）の両日、亀岡天恩郷、綾部天王平に於いて第八回誠心会会長会議・第二十回誠心会員研修会が執り行われ充実した二日間を満喫いたしました。

初日は誠心会、青松会、青年部合同での教主さま御面会、教団方針説明、綾機神社の現況説明、活動報告、懇親会等が行われました。

翌日は会場を綾部の天王平・奥津城へ移動して、山の枯れ木、丸太等の伐採された樹木の運び出しの献劳作業に精を出し十一時三十分頃に作業を終え、昼食後解散をしました。

聖地ではもみじ祭りが開催されていて紅葉もピークを迎えていました。

参加者 高嶋善雄 森川美保

島山茂 報告

行事予定

十二月十五日(日)

月次祭 午前十時半より

後期機関長会議

十二月二十九日(日)

年末大掃除 午前十時より

十二月三十一日(火)

大祓祭 午後一時半より

令和七年一月一日(水)

新年祭 午前十一時より

入学祈願お知らせ

例年、日程を決めて入学祈願祭を行っていましたが、今年度から一般の祈願と同様に個別に受付をすることになりました。

ご希望の方は役員までお申し込みください。日直者をお願いする予定です。

「みろくのよ」誌 値上げについて

○令和7年1月号より価格改定
月刊「みろくのよ」誌 560円
(税込み・送料込み)
50円値上げ/改定前510円

じいじの道草雑話

【タスキ】

特任宣伝使 妹尾 正治

観衆はどよめき、涙を浮かべている。拍手が起きた。又大きなどよめきがその場を包みこんだ。

彼女は足がもつれ何回も地面に倒れこむ、立ち上がって走りかけるのだが意識が朦朧として転倒し、仰向けになってしまった。

赤と白の小旗を持った男が彼女をじっと見つめている。赤旗が小刻みに震えているのが感じ取れた。

仙台市で開催された第四十一回全日本大学女子駅伝の第三区の終盤、中継地点まであと二百五十メートルの所で起きた出来事である。

大阪芸術大学二年生の菅崎選手は極度の脱水症状で、タスキを繋ぐ直前で足が止まってしまったのだ。

中継点では第四走者が涙目でこの様子をじっと見守っている。

菅野は、「何が何でもたすきを繋ぐんだ」と云う強い執念を漂わせている。

旗を持つ男には彼女の命を守り、レースの棄権を告げる権限が有る。

審判員が赤旗を上げれば全てが止まり、全てが白紙になる。男はこの修羅場を静かに見守り赤旗を上げることは無かった。

観衆のどよめきが安堵と拍手に変わった、彼女は倒れるように中継場所に転がり込んだのだ。

大阪芸術大学は十四位でレースを終えた、彼女の死に物狂いでタスキを繋いだ成果であった。

じいじも色々な分野でタスキを繋いで来たが、彼女ほどの重圧は無かったように思う。彼女の責任感、仲間との絆、そして美しいほどの自尊心にじいじも泣いた。



信仰のある者となない者

(『信仰叢話』より)

この世の中だけを見てみると、正直でありながら苦しんでいる者がある。かと思えば、不正直であるにもかかわらず、呑気に生きている者がある。永遠というものが諒解できていないと、かかる現象は不可解な謎となつてくる。ゆえに永遠の理論を把握し、神の意志を信じたときに、人間は初めて安心立命の生涯を送ることができるのであります。

地震や海嘯があつたりしても、それは決して、神々が人間を苦しめるためにわざわざやられるわけではない。人間の身体でも蚤が食つたら搔き、黴菌がはいつたら手術するとかいうような応急処置は身体全体のためには必要なことがあります。それと同一意味において、この大宇宙に地震や海嘯があるのも、要するに、それは一つの清潔法であつて、全体を、より良く生かさんかための地震であり海嘯であります。だから、お互いは身体を、思想を清潔にした毎日を送つてさえおれば、そうした忌むべき事実が少なくなるということを悟らねばならぬのであります。そしてそこが、信仰のある人となない人との非常な違いになつて来るのです。

信仰のある人は、つまり智慧以上の力を感じ、靈魂の不滅を知つているから、一部分に拘泥せず、全体のために祝賀しつつ生活ができます。一時は苦しむことがあつても、六十年の人生だけを基準として考えずに、永遠というものを頭において考えるから、らくに難関を突破することができ、すべてのものに対する見方がほがらかで、感謝に充ちみちており得るのであります。

ところが、信仰のない人はすべてが逆である。自分一代、五十年なり六十年なりに立脚して考えるから、分らんことが沢山ある。目に見えることだけを考えているから、見えんことが沢山あつても考慮のなかに入れないから、すべてがいよいよ分らなくなる。分らなくなるから苦しむ、という風になるのであります。